

# 韻字に「定石」はあるのか

——白居易詩類型表現の一要素をめぐって——

水 谷 誠

## 一

白居易は三千首ほどの詩を残した。専門家でもこれを通讀するのは、なかなか骨が折れる。まして、作る方となると、白氏は自分の總力を投じていると推察できる。そうした苦勞を認めるにしても、大量の作品群を讀み進めるうちに、全く同じではないが、これはどこかで讀んだことがあるなという部分に遭遇する。こうした感想は、筆者だけでなく、多くの白詩讀者に抱かせるものである。平岡・今井の『白詩文集歌詩索引』を作るにあたる動機のひとつにそうした問題意識が根底にあるかもしれない。ただし、索引が完成した今日においても、白詩での類型表現を考察するのは、一筋縄でいかないであろう。あらゆる要素に分解して、そこでの類型化がどのようなのかを、考察

しなければならない。そうした手續を経た上で、改めて總合的に白詩類型化の特色を論及することができるといえる。

そこで、まず手始めに韻字での類型化にかかわる問題點について始めることにしたい。これには、白詩での次に述べる試みがあるからである。これを手掛かりにすることができるとはならない、豫想するからである。

卷五十六の2653 ～ 2652「和春深二十首」（近體・五律）で「家・花・車・斜」で次韻をしている。こうした同一次韻パターンで二十首も作ることができる能力を示したものである。つまり、白氏自身、こうしたことを意圖している以上、韻字以外に豊かな表現力には自信をもっていたということになる。ただし、白詩の類型表現を考察する上で、「和春深二十首」がそれを考察するにふさわしい例なのかどうかを改めて考えざるを得ない。

## 中國詩文論叢 第三十七集

ひとまず、この詩を離れて、他の作品の中に、「和春深二十首」のような決まり切った韻字パターンがあるのかどうかについて、調べることにしてみたい。

そうした固定韻字パターンの有無について、さらにはその頻度について、まず報告することにする。その上で、こうした固定韻字パターンが白詩の類型表現に影響を與えているのか、もし、それが與えているとするならば、どうした點にそれが印象づけられるのかを試論の形で述べることでできれば幸いである。いずれにしても、白詩の類型表現論議のための「肥やし」となれば、と思い、あえて未踏の分野に足を踏み入れることにする。念のため付言すれば、韻字パターンが白詩の類型表現において、決定的な要素であると主張するつもりは、全くないことを最初に述べておきたい。

## 二

韻字をすべて順序通りに拾い出す作業を通して、最初にわかったことは、古體詩と排律については、除外しておいた方が良かったということ。それでも、こうしたことは少しばかり觸って見る必要がある。そうした結果、古體詩と排律では、用いる韻字の排列が異なっている。古體詩の方が自由であって、バリエーションがある。これにも韻字のパターンの要素が見られるが、それらは少数となる。もう一方の排律は、韻字のパター

ンは律詩とほぼ同様であるが、長編となるため、例外的にしか用いられない韻字が入る。こうした僻字韻字に振り回されることになる。このために論が冗長になる。以上の理由によって、白詩での古體詩と排律については、除外して論じることにした。

つまり、ここで論じる対象は、近體の絶句・律詩のみとなる。このようなところからでも、韻字が白詩類型表現を考察するにしても半壁でしかないことを圖らずも示している。<sup>(1)</sup>それはともかく、これまでの論文同様『白氏文集』（那波本）を使って、以下にその結果を示していくことにする。

さらに、時間的制約から、対象が前集のみの調査となってしまった。「半壁」の半分、四分の一であるが、それでもかなりまとまった分量となった。それなりの結果を得ることができた。以下、絶句と律詩の順で、その子細を示すことにしたい。

## 三

まず、絶句の様子を見てみたい。少数例の場合は、その韻での首數のみを示す。なお、最初に、出現順の韻字を提出する。題は適宜省略する。また、題の前は、索引の作品番號である。

上平

一東（十七首）

東—功—中— 0938 「題廬山山下湯泉」（近體・七絶）

同—翁＝0630「代隣叟言懷」(近體・七絶)

叢—中＝0654「廳前桂」(近體・七絶)

紅—中＝0646「再因公事到駱口驛」(近體・七絶)

紅—空—中＝0748「夜惜禁中桃花——」(近體・七絶)

風—通—中＝1296「採蓮曲」(近體・七絶)

風—中＝0744「惜牡丹花二首其一」(近體・七絶)

0765「嘉陵夜有懷二首其一」(近體・七絶)\*2

0943「階下蓮」(近體・七絶)

1048「答微之」(近體・七絶)

1371「湖上夜飲」(近體・五絶)

風—翁＝0801「村居」(近體・七絶)

風—紅—中＝0805「王昭君二首其一」(近體・七絶)

中—風＝1289「青門柳」(近體・七絶)

中—空＝0732「重酬錢員外」(近體・七絶)

中—紅—弓＝1291「暮江吟」(近體・七絶)

中—翁—宮＝0729「詠懷」(近體・七絶)

※「中」の韻字に注目したい。

二冬・三鍾(四首)

五支・六脂・七之(四十二首)

悲—時＝1164「奉酬李相公見示絕句」(近體・七絶)

眉—枝—隨＝0662「感故張僕射諸妓」(近體・七絶)

眉—遲—時＝0823「靖安北街、贈李二十」(近體・七絶)

韻字に「定石」はあるのか(水谷)

眉—詩＝1108「題峽中石上」(近體・七絶)

眉—時＝0806「王昭君二首其二」(近體・七絶)

知—枝＝0623「華陽觀桃花時——」(近體・七絶)

知—詩＝0773「憶元九」(近體・五絶)

知—時＝0782「病中作」(近體・七絶)

0784「遊悟真寺迴山下——」(近體・七絶)

知—衰—絲＝0657「歎髮落」(近體・七絶)

枝—知＝0650「惜玉藥花、有懷——」(近體・七絶)

1117「木蓮樹生巴峽山谷間——三絕句云其一」(近體・七絶)

七絶)

枝—遲—詩＝1151「竹枝詞其四」(近體・七絶)

枝—時—知＝1270「元家花」(近體・五絶)

枝—鵬—知＝1207「傷春詞」(近體・七絶)

欺—旗＝1403「戲醉客」(近體・七絶)

池—差—鶯＝0972「若峴東池」(近體・七絶)

遲—尸＝1307「不睡」(近體・五絶)

遲—時—枝＝0720「杏園花落時——」(近體・七絶)

遲—時＝0723「禁中夜作書與元九」(近體・七絶)

癡—枝＝1139「種荔枝」(近體・七絶)

絲—眉—時＝1249「舊房」(近體・七絶)

絲—時—期＝0791「有感」(近體・七絶)

絲—爲＝1362「湖中自照」(近體・七絶)

## 中國詩文論叢 第三十七集

衰——絲＝0736「感髮落」(近體・五絕)

衰——垂——絲＝0871「白鷺」(近體・七絕)

誰——枝＝1217「寄題忠州小樓桃花」(近體・七絕)

持——思——詩＝0714「禁中九日對菊花酒憶元九」(近體・七絕)

詩——師＝1001「讀靈徹詩」(近體・七絕)

時——詞——詩＝1075「送蕭鍊師……以「絕繼之其」」(近體・七絕)

時——詩＝0864「藍橋驛見元九詩」(近體・七絕)

1254「寄王祕書」(近體・五絕)

時——詩——詞＝0875「江上吟元八絕句」(近體・七絕)

時——知——詩＝0867「武關南見元九題山石榴花見寄」(近體・七絕)

時——遲＝1193「小曲新詞」首其「」(近體・五絕)

時——期——旗＝1036「病起」(近體・七絕)

時——離＝1135「和萬州楊使君四絕句江邊草」(近體・七絕)

妓——詩——眉＝1352「候仙亭、同諸客醉作」(近體・七絕)

儀——詩＝1405「李德裕相公貶崖州三首其「」」(近體・七絕)

兒——枝——伊＝1406「李德裕相公貶崖州三首其「」」(近體・七絕)

蔡——誰＝1407「李德裕相公貶崖州三首其「」」(近體・七絕)

離——歸＝0652「長安送柳大東歸」(近體・五絕)

※「時」「詩」の韻字に注目したい。

## 八微(十一首)

菲——歸＝0640「縣南花下醉中留劉五」(近體・七絕)

飛——歸＝1064「醉吟二首其「」」(近體・七絕)

1174「醉後贈人」(近體・七絕)

微——妃——歸＝1305「聽彈湘妃怨」(近體・七絕)

稀——歸＝1355「送李校書趁寒食歸義興山居」(近體・七絕)

稀——輝——歸＝0851「曲江夜歸、聞元八見訪」(近體・七絕)

歸——非＝1182「商山路有感」(近體・七絕)

歸——衣＝0777「寄內」(近體・七絕)

歸——衣——稀＝1112「贈康叟」(近體・七絕)

威——微——衣＝0940「秋熱」(近體・七絕)

違——稀——歸＝0813「遊城南留元九李二十晚歸」(近體・七絕)

※「歸」の韻字に注目したい。

## 九魚(四首)

十虞・十一模(十四首)

夫——無＝0716「答張籍、因以代書」(近體・七絕)

夫——鋤——(書)＝0781「得袁相書」(近體・七絕)

無——愚＝1171「答州民」(近體・七絕)

衢——塗——無＝0728「雨雪放朝、因懷微之」(近體・七絕)

鵲——珠＝1391「見李蘇州示男阿武詩……」(近體・五絕)

株——無＝1272「惜小園花」(近體・七絕)

殊——蹶——無＝1313「赴杭州重宿棣華驛」(近體・七絕)

灰—無＝1118「木蓮樹生巴峽山谷間……三絕句二其二」(近體・七絕)

### 七絶

都—爐—無＝1124「寄胡餅與楊萬州」(近體・七絶)

途—鬚＝0863「初貶官過望秦嶺」(近體・七絶)

徒—無＝1045「衰病」(近體・七絶)

麤—鬚＝1092「洪州逢熊孺登」(近體・七絶)

孤—無＝0712「絕句代書、贈錢員外」(近體・七絶)

爐—無＝1025「問劉十九」(近體・五絶)

※「無」の韻字に注目したい。

### 十二齊(六首)

十三佳・十四皆(一首)

十五灰・十六哈(三十首)

杯—來＝1129「九日題塗谿」(近體・七絶)

開—臺—來＝0844「雨中攜元九詩……」(近體・七絶)

開—崔—來＝0959「聞李十一出牧澧州……」(近體・七絶)

開—才—來＝1210「吳七郎中山人待制班中……」(近體・七絶)

### 絶

開—來＝0969「大林寺桃花」(近體・七絶)

1076「送蕭鍊師……以二絶繼之其一」(近體・七絶)

1359「戲題木蘭花」(近體・七絶)

開—來—迴＝0912「宿西林寺」(近體・七絶)

灰—來＝0849「夢舊」(近體・七絶)

韻字に「定石」はあるのか(水谷)

迴—來＝0643「醉中歸盤座」(近體・七絶)

1068「湖亭與行簡宿」(近體・七絶)

徊—來＝0708「重尋杏園」(近體・七絶)

迴—開＝1035「東牆夜合樹……」(近體・七絶)

迴—開—來＝1267「送馮舍人閣老往襄陽」(近體・七絶)

迴—來—灰＝0862「鷺子樓三首其三」(近體・七絶)

迴—來＝0836「醉後却寄元九」(近體・七絶)

0874「紅藤杖」(近體・五絶)

1097「別草堂三絶句其三」(近體・七絶)

1252「慈恩寺有感」(近體・七絶)

才—來＝1061「山中戲問韋侍御」(近體・七絶)

栽—開＝0919「移山櫻桃」(近體・七絶)

栽—開—來＝1136「和萬州楊使君四絶句喜慶李」(近體・七絶)

### 絶

栽—來＝0835「和元八侍御……四絶句松樹」(近體・七絶)

栽—來—開＝1005「戲問山石榴」(近體・七絶)

1299「移牡丹栽」(近體・七絶)

來—梅—開＝1292「思婦梅」(近體・七絶)

來—開＝0630「下邳莊南桃花」(近體・七絶)

0637「別韋蘇」(近體・五絶)

1376「木芙蓉花下招客飲」(近體・七絶)

來—灰＝1062「贈曇禪師」(近體・七絶)

※「來」「開」「迴」の韻字に注目したい。

十七眞・十八諄・十九臻(四十八首)

頻一人＝0639「酬王十八李大見招遊山」(近體・七絶)

1386「自歎二首其二」(近體・七絶)

親一人＝0661「冬至夜、懷湘靈」(近體・七絶)

新身＝0792「答友問」(近體・五絶)

新珍一人＝0774「蕭員外寄新蜀茶」(近體・七絶)

塵一人＝0647「期李十二文略」(近體・七絶)

0649「過天門街」(近體・七絶)

1317「山泉煎茶有懷」(近體・五絶)

神身一人＝0638「見楊弘貞詩賦」(近體・七絶)

春一人＝0634「和友人洛中春感」(近體・七絶)

0638「戲題新栽薔薇」(近體・七絶)

0644「遊雲居寺」(近體・七絶)

0763「江上笛」(近體・七絶)

0819「劉家花」(近體・七絶)

0868「病中答招飲者」(近體・七絶)

1160「題東樓前李使君」(近體・七絶)

1178「別樓東坡花樹兩絶其一」(近體・七絶)

1268「莫走柳條詞送別」(近體・五絶)

身一人＝0648「酬趙秀才贈」(近體・七絶)

0660「邯鄲至除夜思家」(近體・七絶)

0798「還李十一馬」(近體・七絶)

0817「高相宅」(近體・七絶)

0878「舟中贈內」(近體・七絶)

1018「自悲」(近體・五絶)

1038「與果上人歿時」(近體・七絶)

1204「憶江柳」(近體・七絶)

1357「獨行」(近體・七絶)

1385「豫以長慶二年冬十月到杭州」(近體・七絶)

絶)

身勤＝0786「病中得樊大書」(近體・七絶)

身神一人＝0686「爲薛臺悼」(近體・七絶)

身貧一人＝0974「哭從弟」(近體・七絶)

身頻一人＝0745「答元奉禮同宿見贈」(近體・七絶)

身巾一人＝0962「上香爐峯」(近體・七絶)

巾春一人＝0655「重到毓村宅有感」(近體・七絶)

巾薪一人＝1382「代賣薪女贈諸妓」(近體・七絶)

巾身一人＝0696「臨江送夏瞻」(近體・七絶)

巾一人＝0840「答勸酒」(近體・七絶)

0927「見紫薇花憶微之」(近體・七絶)

銀一人＝1221「朝迴和元少尹絕句」(近體・七絶)

鱗一人＝0688「題流溝寺古松」(近體・七絶)

人春＝1030「醉中對紅葉」(近體・五絶)

1264「勤政樓西老柳」(近體・五絶)  
人—身＝0635「冬至宿楊梅館」(近體・七絶)

0766「夜深行」(近體・七絶)

0868「紅鸚鵡」(近體・七絶)

0982「臨水坐」(近體・七絶)

筠—人＝0722「同錢員外禁中夜直」(近體・七絶)

(君)—春—人＝0733「獨酌憶微之」(近體・七絶)

※「人」「身」「春」の韻字に注目したい。

二十文(二十一首)

(人)—聞—君＝1149「竹枝詞其二」(近體・七絶)

分—君＝0638「曲江憶元九」(近體・七絶)

0816「重到城見元九七絶句其一」(近體・七絶)

紛—分＝0703「花下自勸酒」(近體・七絶)

聞—君＝1023「夢微之」(近體・七絶)

1300「聽夜箏有感」(近體・七絶)

君—文＝1096「別草堂三絶句其二」(近體・七絶)

君—裾＝0768「江岸梨」(近體・七絶)

裾—君—聞＝1303「和殷協律琴思」(近體・七絶)

群—雲＝0636「寄陸補闕」(近體・七絶)

群—雲—聞＝0827「賦得聽邊鴻」(近體・七絶)

醺—君—(人)＝0987「戲贈李十三判官」(近體・七絶)

雲—分—君＝1029「題韋家泉池」(近體・七絶)

韻字に「定石」はあるのか(水谷)

雲—文＝0667「祕書省中憶舊山」(近體・七絶)

0738「酬王十八見寄」(近體・七絶)

雲—聞＝1002「聽李士良琵琶」(近體・七絶)

雲—聞—君＝1098「鍾陵餞送」(近體・七絶)

雲—君＝0847「寄生衣與微之、因題封上」(近體・七絶)

1058「戲答諸少年」(近體・七絶)

1154「答楊使君登樓見憶」(近體・七絶)

雲—君—文＝0740「和錢員外青龍寺上方望舊山」(近體・七絶)

絶)

※「君」「雲」の韻字に注目したい。

二十三魂・二十四痕(六首)

(園)—恩—門＝1290「梨園弟子」(近體・七絶)

門—昏＝0631「三月三十日、題慈恩寺」(近體・七絶)

0775「寄上大兄——」(近體・七絶)

0904「望江州」(近體・七絶)

門—痕＝1228「後宮詞」(近體・七絶)

門—恩＝1293「怨詞」(近體・七絶)

※「門」の韻字に注目したい。

二十五寒・二十六桓(八首)

※「看」の韻字が八例のうち七首に用いられている。すべて

末尾の韻字になっている。

二十七刪・二十八山(十四首)

## 中國詩文論叢 第三十七集

閒—斑—山＝1137＋「望郡南山寄行簡」(近體・七絶)<sup>3</sup>  
 閒—山＝0833「和元八侍御……四絶句累土山」(近體・七絶)  
 1119「木蓮樹生巴峽山谷間……三絶句云其三」(近體・七絶)

閒—閑＝0638「留別吳七正字」(近體・七絶)

0699「問淮水」(近體・五絶)

閒—閑—山＝0663「遊仙遊山」(近體・七絶)

閒—關—山＝0932「過鄭處士」(近體・七絶)

顏—山＝0635「整座縣北樓望山……」(近體・五絶)

還—閒＝0707「翰林中送獨孤……」(近體・五絶)

山—閒＝1232「馮閣老處……因戲贈絶句」(近體・七絶)

山—閒—閑＝0711「同錢員外題絶糧僧巨川」(近體・七絶)

山—環＝0834「和元八侍御……四絶句高亭」(近體・七絶)

關—山＝1309「宿陽城驛對月」(近體・五絶)

關—山—閑＝0665「長安閑居」(近體・七絶)

※「閒」「山」の韻字に注目したい。

## 下平

一先・二仙(二十六首)

絲—天—前＝0794「聞蟲」(近體・七絶)

眠—前—年＝1095「別草堂三絶句其一」(近體・七絶)

天—輓＝1169「寒夜夜」(近體・七絶)

天—年＝0630「秋雨中贈元九」(近體・七絶)

0796「贈內」(近體・七絶)

1143「東樓醉」(近體・七絶)

天—眠＝0795「寒食夜有懷」(近體・七絶)

天—船＝1070「贈江客」(近體・七絶)

年—天—圓＝1206「三年別」(近體・七絶)

年—前＝0771「答驛夢」(近體・七絶)

0783「感化寺見元九……」(近體・七絶)

年—船＝1168「三月三日」(近體・七絶)

仙—年＝1380「重訓周判官」(近體・七絶)

仙—蓮—前＝1297「隣女」(近體・七絶)

前—天—眠＝1200「獨眠吟二首其一」(近體・七絶)

前—年＝0719「寒食夜」(近體・七絶)

前—蟬—天＝0790「暮立」(近體・七絶)

前—船—邊＝0973「建昌江」(近體・七絶)

前—然＝0820「裴五」(近體・七絶)

全—前＝0734「微之殘牡丹」(近體・七絶)

船—禪＝1314「寓言題僧」(近體・七絶)

煙—然—年＝0861「鸞子樓三首其二」(近體・七絶)

絃—年＝1192「小曲新詞二首其一」(近體・五絶)

蓮—邊＝1122「龍昌寺荷池」(近體・五絶)

然—年—天＝0689「感月悲逝者」(近體・七絶)

然—眠＝0788「晝臥」(近體・五絶)



※「天」「前」の韻字に注目したい。

三蕭・四宵(三首)

六豪(二首)

七歌・八戈(十一首)

多—何＝0832「聽水部吳員外新詩……」(近體・七絶)

0885「雨中題衰柳」(近體・五絶)

跬—何—多＝1074「問韋山人」(近體・七絶)

莎—多＝0841「題王侍御池亭」(近體・七絶)

歌—多—何＝1123「聽竹枝贈李侍御」(近體・七絶)

歌—何＝0901「強酒」(近體・七絶)

歌—和＝1191「太平樂詞二首其一」(近體・五絶)

何—多＝0637「華陽觀中、八月十五日夜……」(近體・七絶)

何—和—多＝0918「惜落花、贈崔二十四」(近體・七絶)

河—多＝0656「亂後過流溝寺」(近體・七絶)

羅—他—多＝1134「和萬州楊使君四絶句競渡」(近體・七絶)

※「多」「何」の韻字に注目したい。

九麻(十一首)

茶—家＝1209「吟元郎中白鬚詩……」(近體・五絶)

家—花＝1137「和萬州楊使君四絶句白槿花」(近體・七絶)

1404「紫陽花」(近體・七絶)

沙—家＝0966「三月三日登庾樓、寄庾三十一」(近體・七絶)

衙—花＝1353「城上」(近體・五絶)

韻字に「定石」はあるのか(水谷)

花—家＝0629「過劉三十二故宅」(近體・七絶)

0767「望驛臺」(近體・七絶)

0832「和元八侍御……四絶句看花屋」(近體・七絶)

1350「題靈隱寺紅辛夷花……」(近體・七絶)

霞—家—花＝0632「看渾家牡丹花……」(近體・七絶)

華—家＝1181「棟華驛見楊八題夢兄弟詩」(近體・七絶)

※「家」「花」の韻字に注目したい。

十陽・十一唐(二十一首)

※この韻での、重複ユニットはなかった。「郷」の韻字が七例あるが、右に述べてきた特色ある韻字とは認めづらい。

十二庚・十三耕・十四清(二十五首)

兵—平＝1190「太平樂詞二首其一」(近體・五絶)

明—京—聲＝0916「答春」(近體・七絶)

明—清—聲＝1138「和行簡望郡南山」(近體・七絶)

明—聲＝0753「禁中聞蛩」(近體・五絶)

0789「夜坐」(近體・七絶)

0883「舟中讀元九詩」(近體・七絶)

名—明＝1040「劉十九同宿」(近體・七絶)

莖—生—兄＝0725「寄陳式五兄」(近體・七絶)

輕—程＝0760「山枇杷花二首其一」(近體・七絶)

迎—情—行＝0684「晚秋閑居」(近體・七絶)

行—名＝1319「吉祥寺見錢侍郎題名」(近體・五絶)

## 中國詩文論叢 第三十七集

行—聲＝086「發商州」(近體・七絶)

0984「遺愛寺」(近體・五絶)

情—營—行＝0621「城東閑遊」(近體・七絶)

情—平—生＝0778「病氣」(近體・七絶)

情—平—明＝0797「得錢舍人書問眼疾」(近體・七絶)

生—情＝0697「冬夜示敏巢」(近體・七絶)

生—行—明＝1203「長洲苑」(近體・七絶)

程—行—城＝0727「送元八歸鳳翔」(近體・七絶)

聲—行＝0717「曲江早春」(近體・七絶)

聲—情—行＝1197「殘春曲」(近體・七絶)

錚—明—聲＝1302「琵琶」(近體・七絶)

成—情＝1370「樟亭雙櫻樹」(近體・七絶)

成—聲—明＝1208「後宮詞」(近體・七絶)

城—迎—榮＝1094「又答賀客」(近體・七絶)

※「明」「聲」「行」の韻字に注目したい。

十五青(一首)

十六蒸・十七登(六首)

十八尤・十九侯・二十幽(二十四首)

秋—州＝0704「題李十一東亭」(近體・七絶)

秋—頭＝1205「南浦」(近體・五絶)

州—遊—愁＝0676「長安正月十五日」(近體・七絶)

州—愁＝1163「送高侍御使廻、因寄楊八」(近體・七絶)

州—劉—遊＝1037「夢亡友劉太白同遊彰敬寺」(近體・七絶)

愁—籌—州＝0710「同李十一醉憶元九」(近體・七絶)

愁—休—州＝0843「雨夜憶元九」(近體・七絶)

愁—樓＝0961「東樓新歲」(近體・五絶)

憂—頭—樓＝1060「題崔使君新樓」(近體・七絶)

遊—頭＝1269「酬韓侍郎張博士雨後遊曲江見寄」(近體・七絶)

絶)

遊—州＝0659「除夜宿洛州」(近體・七絶)

遊—秋—愁＝1285「曲江憶李十一」(近體・七絶)

遊—愁—秋＝0679「宿桐廬館——」(近體・七絶)

悠—州＝0799「九日寄行簡」(近體・七絶)

流—頭—愁＝0694「寄湘靈」(近體・七絶)

劉—由—州＝0869「題四皓廟」(近體・七絶)

頭—愁＝0759「山枇杷花二首其一」(近體・七絶)

頭—愁—休＝1256「自問」(近體・七絶)

頭—秋—州＝0865「韓公堆、寄元九」(近體・七絶)

頭—遊—秋＝1242「立秋日登樂遊園」(近體・七絶)

頭—樓—愁＝0899「歲暮道情二首其二」(近體・七絶)

溝—愁＝1199「長樂坡」(近體・七絶)

樓—愁—頭＝0903「聽崔七妓人箏」(近體・七絶)

樓—愁—州＝1145「東樓招客夜飲」(近體・七絶)

※「州」「愁」の韻字に注目したい。

## 二十一侵(十三首)

心—金＝ 1034「對酒」(近體・七絶)

心—琴＝ 1333「虛白堂」(近體・七絶)

心—吟＝ 1004「閑吟」(近體・七絶)

心—陰＝ 0709「曲江獨行……」(近體・七絶)

沈—心＝ 0870「罷藥」(近體・七絶)

沈—心—深＝ 0633「送張南簡入蜀」(近體・七絶)

深—吟—心＝ 1167「錢號州以三堂絶句見寄、因以本韻和之」

(近體・七絶)

深—心＝ 0645「和王十八薔薇澗花時……」(近體・七絶)

0831「仇家酒」(近體・七絶)

深—陰—心＝ 0764「嘉陵夜有懷二首其一」(近體・七絶)

陰—心＝ 0838「歲暮道情二首其一」(近體・七絶)

林—心＝ 0701「及第後憶舊山」(近體・七絶)

1170「代州問民」(近體・七絶)

※「心」の韻字に注目したい。

二十二覃・二十三談(一首)

二十七銜(二首)

以上、絶句での韻字の詳細について見てきた。こうした中で、  
韻字も順序も全く同じユニット(組)も得られた。これを表にす  
ると以下のようなになる。

韻字に「定石」はあるのか(水谷)

代表韻目		韻字組	用例数
一東		風—中	5
五支		知—時	2
八微		枝—知	2
		時—詩	2
		飛—歸	2
十五灰		開—來	3
		廻—來	2
		廻—來	2
		廻—來	4
		裁—來	2
		來—開	3
十七眞		頻—人	2
		塵—人	3
		春—人	9
		身—人	10
		巾—人	2
		人—春	2
		人—身	4
二十文		分—君	2
		聞—君	2
		雲—文	2
		雲—君	3
二十三魂		門—昏	3
		閒—山	2
二十七刪		閒—閑	2

## 中國詩文論叢 第三十七集

一先	天	年	3
	年	前	
七歌	多	何	2
九麻	家	花	2
	花	家	
十二庚	明	聲	3
	行	聲	
二十一侵	深	心	2
小計			95

白居易の絶句では、こうした韻字の組が九十五例もあることがわかった。卷十三から卷二十の八百三首のうち、絶句は三百九十一首を占める。約半数が、絶句といえる。その絶句の四分の一に當たる九十五首が同じ韻字の組を持つ詩であることがわかった。これが、果たして類型表現だという感覚を有無かどうか、については改めて考えなければならない。これと同時に、各韻のところで示したある特定の韻が、そうした類型表現感覚を有無のかどうか、併せて考えなくてはならないだろう。

ところで、近體詩のもう片方の律詩について、述べることにしたい。まず、最初に絶句に見えた韻字が同じ順序で出現するユニットは、一組しか見られなかった。

## 上平

十七眞・十八諄・十九臻(二十四首)

春—人—塵—身— 0925「遊寶稱寺」(近體・五律)

1158「感春」(近體・五律)

これのみである。また、絶句においてこの眞韻グループでよく見られた「春—人」「身—人」の組み合わせもしばしばあるが、これらに前後する韻字が異なることで、絶句ほど「全同」という感觸をもたらししていないといえる。なお、絶句の各韻グループ末に示した注目すべき韻字は、律詩においても高い出現率を持っていることを付言しておきたい。<sup>(4)</sup>

## 四

以上、絶句を中心に韻字の振る舞いを見てきた。そうした有り様が、類型表現を生むか否かについて、考察を進めなくてはならない。その中の注目韻字について、考察するのが本筋であるが、ここではエポックになりそうな「人」での様子をまず見てみることにする。

眞韻グループで用いられた四十七例の「人」韻字の前の二字をも併せてみてもみる。このうち、前の二字も同じ例を示す。番号はすべて作品番號である。

「屬他人」0639・0817

「無一人」0647・0649

「遠行人」0660・0695

「是何人」1204・1382

「唯兩人」0722・1221

このように十例もある。また、

「不〇人」のような一字だけ異なる例は、「不如人」1396・

「不傷人」0624・「不過人」1018

・「不要人」1357・「不見人」0686 というように五例ある。

同様に、「愛〇人」では、「愛茶人」1317・「愛山人」0644・

「愛花人」1178 の三例ある。

「少〇人」では、「少睡人」0763・「少情人」0819 の二例ある。

「作〇人」では、「作主人」1038・「作俗人」1385 の二例ある。

「屬何人」0745 は、「屬他人」の派生形と見なすこともできるであろう。

このように真韻グループで用いられる「人」韻字の四十七例中、約半数の二十三例での一句内下三字に類似表現があることがわかった。

この「人」と同じような現象が見られるかどうかを、麻韻の「家」と「花」で見してみよう。「家」では十例あり、「花」では八例ある。結論を先に述べれば、「花」では「人」でのような類似表現がなかった。「家」では「屬〇家」というのが、「屬庾家」0966・「屬元家」0832・「屬楊家」1181と三例あった。また、「有元家」1209も0832の派生形と考えても良いであろう。「花」とは異なり、「家」は「人」と同じような傾向があることがわかった。上の注目韻字においても、この麻韻での「家」と「花」

韻字に「定石」はあるのか（水谷）

のように、類型表現を生むか否かを見るに当たって、個々に當たらなければならぬといえる。

最後に、名詞ばかりでなく、動詞での例を見ておきたい。微韻の「歸」である。十例ある。動詞であるので、自由度が高い。このため、三字とも同一という例はなかった。類似としては、「郎不歸」1305・「老不歸」1112 をあげることができる。これに、「猶未歸」0777、それに反語の「欲何歸」1064 も参考として付け加えることができるであろう。さらにいえば、三字同一表現ではないが、「到夜歸」0640 と「名月歸」0851 は近いところにあるといえるかもしれない。こうした點で、動詞や形容詞でのケースを考える場合、多角的に考察する必要があるであろう。「歸」の例では、類型表現と受け取ってよいものもあるといえるであろう。

さて、ここでの小結として、韻字部分における類似は、他の部分より強い印象を生むであろうといいたい。別の作品での既読感をもたらす危険性をともなっていることはいうまでもない。白居易ほどの多作となると、近體詩においてこうした類型表現を生みがちであろうことは豫測の範囲とはいえず、それよりもかなり多いといわざるをえなかった。つまり、先行する二字部分を含む一部韻字群において、類型表現を生んでいるといえる。

## 五

白居易の近體詩における韻字が、類型表現を成り立たせている要素と認めるか否かについて述べてきた。もちろん、ここでは、この要素が類型表現を生む決定的要素と主張するものではない。最終的に、ここで述べる要素がどのように絡み合っており、トータルとしての白詩類型表現を成り立たせているのかを考察するのは、より高次の考察が必要となる。このために、本稿が「捨て石」となれば幸いである。

最後に、本稿のテーマ、「韻字に定石はあるのか」について、答えなければならない。ここでの考察の通り、白居易の近體詩には、韻字の定石がある、といえる。いくつかのパターンを持っている。このパターンのない韻字については、基本的に使われない。使っても、少数例にとどまる。たとえば、杜甫ではよく用いる青韻も、白居易近體詩は少ない。

これに反して、白居易の古體詩においては、韻字の定石はない。固定したパターンを見つけようと探しても、換韻での二聯部分での一致は見られるが、その他には見られない。四聯ほどの短い古體詩でも同様である。この点で、白居易は、近體詩と古體詩で作る上での構えが違っていたようである。早い話、最初から古體詩を作るのか、近體詩を作るのか、定まっていたといえる。良い一句が浮かんだときでも、それが近體になるのか

か古體になるのかは、決まっていたということである。すなわち、「定石」が浮かんだか、浮かばなかったの差があったということである。これが作詩のいつの時点かまでは、答えられないのが、筆者の能力不足によるものではない。

## 【注】

- (1) もちろん、古體詩の韻序についても、調査してある。ごく短い換韻部分をのぞいて、同じ韻字の韻序は現れないことを、まず記しておきたい。細かな興味深い現象については、紙幅の関係上省略する。
- (2) 上に韻字のユニットかないのは、右に同じ韻字のユニットあることを示す。以下、同じ。
- (3) 『白氏文集歌詩索引』では、この詩の作品番號を失っている。このため「+」の記號を付して、前の詩と區別することにした。
- (4) 古體詩においては、ここで示した韻字の出現率は、他の韻字ほど突出していない。この点において、古體詩での類似表現を考える場合、韻字は除外して考察した方が良いと思われる。
- (5) たとえば、歌韻の「何一歌」= 0578「短歌行」(古體・雜言・換・0607「醉歌」(古體・雜言・換)や、馬韻の「者一下」= 0127「王後」(古體・雜言・換)・0586「東墟晚歌」(古體・七言・換をあげる。